

『フランス語基本動詞 50』について

水野雅司

1. 作成の意図

教科書作成のための研究会での討議のなかで、副教材として、基本動詞の用法理解のための例文集「フランス語基本動詞 50」を作成することとした。これは文法理解と同時に、言語運用という観点から、動詞を中心とした構文の理解とその習得が必要不可欠であると判断したためである。

初級文法の知識を具体的な例文を用いて確認すると同時に、例文の暗記を通して、実際の場面での発話・作文を助ける、いわば「反射神経」を養うことをも狙ったものである。

1.1. 方針

作成に当たっては、以下の点を考慮した。

1) 中級レベルの学生を対象とする。初級文法を終えていることを前提とするが、例文の選択および解説等に関しては、運用という観点から初級レベルの文法の確認と構文の習得に重点を置く。

2) 扱う動詞の選択に当たっては、必要最低限と思われる動詞 50 に絞り、各々に例文と必要に応じて意味・用法に関する解説を加える。また例文に用いる語彙についても、できるだけ出現頻度の高いものを選ぶようにした。頻度・重要度の判断には、主に以下の文献を参考にした。

- Jean Baudot, *Fréquence d'utilisation des mots en français écrit contemporain*, Les Presses de l'Université de Montréal, 1992.
- 『ラールスやさしい仏辞典 niveau 1』, 駿河台出版社, 1983 年(*Dictionnaire*

du français langue étrangère niveau I, Librairie Larousse, 1978).

- 荒木昭太郎他『スタンダードフランス基本単語 3469』, 大修館書店, 1972 年.

ただし、必ずしも頻度のみでこだわらず、経験的・直感的に重要度の高いと思われるもの、外来語などを通して学生がすでに知っている語彙については、例文の意味・状況を分かりやすくするために積極的に取り上げるが、全体として必要以上に語彙数が多くならないよう配慮する。

3) 学習者が暗記することを前提とし、できるだけ状況がイメージしやすい例文を作る。また、使用する時制・法についても、できるだけ多様な状況を想定し、とくに制限を設けることはしない。

こうした基本方針に基づき、各教員の学習指導経験から様々なアイデアを出し合い、50の動詞につき計220の例文、および基本的な時間表現に関する例文を9例加え、合計229の例文を作成した。

2. 「フランス語基本動詞 50」の概要

以下、この「フランス語基本動詞 50」の作成に当たって留意した点、また中級レベルのフランス語学習におけるこうした動詞表現集の活用必要性と意義について、学習者の実践的なフランス語力を向上させるために施した若干の創意工夫について、まとめておきたい。

2.1. 基本動詞例文集の必要性

外国語習得のために文法の正確な理解が必要であることは言うまでもないが、運用という観点から見たとき、欠かすことのできないのは、そうした知識をいかに「身体化」しているかということである。実際の発話においては、孤立した文法知識ではなく、文という単位でそれを使いこなす応用力、すなわち、時制・法・態・シンタクスといった複雑にからみ合った文法的知識、語法や語彙についての知識を、一つのまとまった文として実現する能力が必要とされる。そのために有効なのは、模範となりうるストックフレーズをできるだけ多く身につけることであり、とりわけ初期の段階では、動詞を中心とした基本的な構

文を正確に記憶することである。

例えば、aller と visiter は、それぞれ「行く」と「訪れる」と訳されるが、どちらも類似の事態を示すことが出来る。ただし、aller は自動詞で場所を示す名詞の前に前置詞を必要とするのに対し、他動詞である visiter は、直接目的補語をとり、受動態で使用されることもある。こうした基本的な文法的知識は、単なる知識としてではなく、いつでも取り出せるストックフレーズとして身につけておくことが望ましい。実際、中級レベルの授業においても、学生はこの二つの動詞の意味・用法について多くの場合正確な知識を持っており、仏文和訳では問題が生じることはないが、作文をさせてみると、用法についての基本的な誤りを犯すことが多い。こうした知識は、個々に独立した状態で学習するよりも、ある時点で、他の語彙との比較を通して明示的に整理して確認するほうが、記憶しやすいだけでなく、よりいっそう実践的な知識となるであろう。

したがって、中級レベルの学習者が実践的な運用力を身につけるうえで必要なのは、初級レベルで学習した文法的知識を、こうした運用を意識した観点から確認していくことである。その意味で、基本動詞を中心とした構文の暗記は、運用知識を身体化するための第一歩であるといえる。

2.2. 動詞の選定

基本動詞として取り上げる 50 の動詞の選択に当たっては、まず初級文法ですでに学習しているもの、および前述の参考資料および教員の経験などから、使用頻度が高く、かつ用法が多岐にわたり利便性の高いものを取り上げた。

avoir や être のような、本動詞としてだけでなく、複合形や受動態において重要な役割を担うものはもちろんであるが、pouvoir, vouloir などの助動詞、使役動詞 faire, laisser、また voir, écouter などの知覚動詞、その他、aller, venir など往来発着を示す動詞、mettre, prendre といったごく基本的な意味をもつ行為動詞で、かつ用法の多岐にわたるものなど、基本中の基本とというものを挙げるだけでもすでに 50 という上限に限りなく近づいてしまい、当然のことながら最終的に選んだ動詞の顔ぶれもそれほど独創的なものではない。むしろ、初級を終了した時点で重要なのは、学習者に習得すべき必要最低限の動詞

の一覧を基準として示し、学習の方向性を明確化しておくことである。

2.3. 語義

まず、それぞれの動詞の語義については、例文を通して理解することを前提とし、取り上げた動詞の各用法について必ずしもそれに対応する意味を訳語というかたちで示すことはしなかった。これは、後に述べるように、学習者が語の意味を日本語との一対一対応で機械的に覚えてしまうことを避けるためである。意味は、訳文と必要に応じて用法の解説のなかで示すようにし、まずはフランス語原文に集中できるように配慮した。

ただし、取り上げた動詞のなかでも特に用法の多岐にわたるものについては、最初にできるだけ基本的な意味、すべての派生的な意味に共通する意味を示すように努めた。これは、訳語を提示する代わりにその動詞のもつ基本的な発想を示すことで、複数の派生的な意味を有機的に関係づけて理解させるためである。

例えば、非常に多くの意味を持つ *mettre* のような動詞は、「置く」「入れる」「着る」「身につける」などといった語義を一つ一つ確認する前に、その基本的な発想である「位置・状態を変化させる」という意味を把握し、その上で、それぞれの派生的な意味を確認するほうが、原語のニュアンスをよりよく理解し、多岐にわたる用法に対応した語彙力を養えると考えたからである。もちろんすべての動詞についてこうした仕方が必ずしも有効かつ現実的であるわけではないが、原則として使用の文脈を意識させるため直訳的な語義の提示はなるべく控え、例文を通して意味を理解させるよう努めた。

2.4. 例文の作成

例文の作成に当たっては、それぞれの動詞の意味・用法のうち、できるだけ代表的な用例を取り上げるよう努めた。また例文の採用に当たっては必ずしも既存の文献や実際の発話からの *authentique* な文にこだわらず、最初に述べた方針に従い、語彙的な負担をある程度軽減しながら、動詞の用法と構文理解に集中できるように配慮した。言うまでもなく作成の過程において仏語話者の

チェックを経ている。

例文のそれぞれに訳文を付したが、原文と日本語との違いを分かりやすく示すため、場合によってはかなりの意識をしてある。必要に応じて括弧内に直訳を示しておいた。

また、意味・用法という観点からだけでなく、具体的な文脈での使用という観点から、例文集全体としてすべての時制・法にわたるよう心がけた。ただし主に文章語として用いられる直説法の単純過去および前過去、接続法の半過去および大過去は今回の例文集には採用しなかった。また、接続法や条件法などを含む例文については、その用法についての簡単な解説を加え、学習者の注意を喚起するよう努めた。

2.5. 動詞の配列

どのような順序で50の動詞を配置するかという点については、特に明確な基準があったわけではないが、意味・用法のうえでできるだけ関連性の強いものをまとめて取り上げることで、個々の動詞を孤立した状態ではなく、他の動詞と比較対照しながら学び、意味・用法における共通点と差違を整理しながら覚えることができるよう配慮した。助動詞、使役動詞、知覚動詞、意味・用法の類似した動詞などはまとめて配置し、さらに関連のある用例については相互参照できるよう用例に付した番号を解説のなかに表示した。

またより一般的な動詞についても、学習者がつまづきやすいものは、比較しやすいよう並べて配置するようにした。例えば、travailler のような比較的単純かつ明確な意味を持つ動詞の場合でも、多くの学生は、日本語の「働く, 労働する」という意味にひきずられ、étudier 「勉強する, 研究する」と対立的に用いる傾向があるが、travailler には必ずしもそのような対立的含意はなく、「勉強する」という意味の自動詞としても頻繁に用いられる。この用例集では、したがって étudier という動詞の後に travailler を配置することで、語彙的知識を修正できるようにした。

具体的には、

Il a travaillé pendant toute la nuit.

という一般的な例文とともに

Théodule est étudiant mais ne travaille pas sérieusement.

という文を付け加えることで、日本語による解説だけに頼ることなく、フランス語の例文の内部で必要な語彙知識を身につけられるよう配慮した。

2.6. 関連語

このような意味・用法に関するちょっとした補足によって、語彙に関する知識を修正しておくことは、単に知識の獲得という意味以上の重要性がある。というのも、この段階で学習者は、ともすれば語の意味を日本語の単語との一対一対応で把握し、機械的な直訳の習慣を身につけてしまう危険があるからである。この段階で、日本語とフランス語の語彙の意味範囲のずれ、用法上の差違、そしてその背後にある、いわば「文化的な」差違についての感性を養っておくことは、その後のフランス語学習の進歩に大きく関わってくる。

実際、中級の段階では、学習者の語彙についての知識は断片的である場合が多い。このレベルの授業では、したがって、単語を孤立した状態で覚えるのではなく、意味・用法を確認しながら、同時に関連する語彙も覚えてしまったほうが、記憶という観点からも用法の理解という観点からも効率的であり、その意味で、関連する基本語彙は積極的にとりあげるべきであろう。

例えば、*aimer* という動詞は、直接目的補語が取る冠詞の定・不定によって意味が異なり、注意が必要であるが、これは、*adorer*, *admirer*, *détester*, *hair* などの類義語や対義語にも共通した用法上の特徴である。その意味で、これらを同時に覚えることは、記憶という点で効率的であるばかりでなく、用法の理解という点からも必要不可欠である。同様に、*plaire* という *aimer* と類似した意味の動詞とその文法的性質の違いや、*aimer mieux* と *préférer* という表現の構文上の違いなどについても、中級レベルでは同時に学習することが望ましい。

この用例集では、学習者の運用力を高めるべく、できるだけ基本動詞の学習を、このように語彙上の関連性と文法理解という二つの軸に沿って行うよう配慮した。類義語や対義語は積極的に取り上げ、必要に応じて、例文として提示

した。

また、同様の観点から、取り上げた動詞と同語源の派生語を示しておくことも有効であると思われるが、今回はごく基本的なもののみを示すにとどめた。学習者のレベルを考慮しつつ今後さらに改善していきたい点である。

2.7. フランス語的発想の習得

中級レベルのクラスで簡単な作文練習などを行う場合、よく見られるのは次のような場面である。学生は与えられた日本語文を、日本語の文法的な単位に基づいて分解し、その上でそれぞれをフランス語の単語に置き換えシンタクスに合わせて組み立てることで「答え」を導き出そうとする。知らない単語がある場合には、和仏辞書に頼り、しばしば直訳する。

こうしたやり方が問題なのは、学習者に十分な文法的知識があったとしても、初習者が陥りがちな言語についての名称目録的な考え方を無意識裡に強化してしまい、その言語に固有の論理・発想を身につける機会を奪ってしまうという点である。すでに指摘したように中級以上のレベルでは、対象言語に内在する、こうした文化的な差違にも学習者の注意を向けることが語学力の向上をはかるためには必要不可欠である。この用例集では、こうした観点から、学習者が躓きやすいポイントについては、解説を付すことで注意を喚起するとともに、そのポイントをできるだけ例文そのものを通して身につけられるように配慮した。

例えば「～できる」という日本語表現から、学生たちは機械的に *pouvoir + inf.* を用いる傾向があるが、フランス語では、状況に応じて、*savoir + inf.*, *arriver à + inf.* などの表現があり、場合によってははっきりとした区別がなされる。ごく基本的な語彙であるが、直訳的な思考法にとどまっている限り、こうした区別が明確に意識されることはない。

この例文集では、*pouvoir* の項に次のような例文を加えることで、こうした知識の「身体化」を狙った。

Je sais conduire mais je ne le peux pas parce que j'ai bu.

また、savoir の項でも、同様の例文を参照させることで、こうした用法上の違いに注意を喚起するようにした。同じく arriver の項にも arriver à + *inf.* 「～できる」という用法に1項目を設け、例文とともに pouvoir とのニュアンスの違いを示す簡単な解説を加えた。

このように、この例文集では、関連のある語彙・表現についてはできるだけ比較・相互参照を通して、語彙知識を有機的に関連づけながら、フランス語固有の言い回しとその発想を身につけることができるよう配慮した。

3. 今後の課題

以上に見てきたような、学習者のフランス語運用力を高めるためのさまざまな工夫・配慮は、各教員が日頃授業で行っていることであり、今回作成した「フランス語基本動詞 50」は、そうした積み重ねのうちの、ほんの一部分をまとめたものにすぎない。学習者が実際にその語学力を高めていくためには、授業での教員による一人一人の学習者のレベルに合った時宜に合った指導と学習者自身による反復が不可欠であることは言うまでもない。今回、われわれが作成したのは、そうした日々の実践のなかで、主に学習者が自分自身で、授業で学んだ基本的な事柄を確認し、暗記を通して、そうした知識を実際の発話の場面で運用できるようにするための副教材である。もちろんこれは出発点にすぎず、今後さらに試験的に使用しながら、試行錯誤を重ね、より完成度の高いものを目指したいと考えている。

実際、今回、表現集に採用しなかった動詞で重要性の高いものは他にも数多くあり、50 という数および採用する動詞の優先順位について今後さらなる検討が必要である。また、例文についても、内容の分かり易さと文法的知識や語法の確認という目的のあいだでのバランスをどう取るか、あるいは日本語訳や解説などについても、まだまだ改善の余地は多い。

さらに、こうした用例集は、Web 上で公開し、学習者が自由にアクセスできるようにすることで、より効果的な活用が期待できるであろう。とりわけ、例文同士の相互参照や、関連項目への移動などは、html 文書のようなハイパーテキストのほうが適しており、直感的により分かりやすいインターフェイスで学

ぶことが可能になるだろう。また、各例文にフランス語話者による実際の発音を音声データとして埋め込むことで、ディクテや発音練習を兼ねた、より実践的で効果的な学習も可能になる。これに加えて、Web上に確認問題や練習問題を用意すれば、いっそうの効果を期待できるであろう。今後の改訂に合わせて、実現に向けて努力していきたい。

ⁱ 今回採用した50の動詞は以下のとおり。取り上げた順に示す。avoir, être, aimer, préférer, plaire, vouloir, pouvoir, devoir, falloir, aller, venir, partir, sortir, arriver, visiter, monter, descendre, passer, penser, croire, trouver, savoir, connaître, apprendre, étudier, travailler, faire, laisser, prendre, mettre, porter, attendre, chercher, entendre, écouter, regarder, voir, parler, dire, écrire, lire, demander, donner, présenter, montrer, acheter, appeler, téléphoner, commencer, finir.

(附記)

本研究ノートは、2007年度に行われた外国語教育研究センタープロジェクトの成果をまとめたものである。